

## ローマ人への手紙15章1-13節 「一つ思いになった神の栄光」

### 1A 負うべき愛の負債 1-6

#### 1B 隣人の益 1-3

#### 2B 聖書による忍耐と励まし 4-6

### 2A 異邦人の神への賛美 7-13

#### 1B 互いの受け入れ 7-12

#### 2B 望みによる満たし 13

## 本文

ローマ人への手紙 15 章を開いてください。私たちは、パウロが情熱として抱いていた神の真理である、「兄弟たちにある一致」について見てきています。14 章の初めから始まっていますが、キリストの体において、兄弟の意見を裁いてはいけないということを学びました。裁くことは、自分自身をキリストの位置に置くことであり、神に対して申し開きすることになるという戒めです。そして後半、13 節からは、兄弟にとってつまずきとなるものを置かない、ということです。兄弟のために、キリストが命を捨てるほどの価値のある存在ならば、自分にとって良いと思うことによっても、それが非難の元になってはいけない、ということでありました。そして 15 章に入りますと、思いを一つにすることによって、神に栄光を帰することができるという内容です。キリストの体が体と呼ばれているのは、まさに「私たちがキリストにあって一つになっている」ということです。この奥義に向かって、私たちは前進しているということですね。

### 1A 負うべき愛の負債 1-6

#### 1B 隣人の益 1-3

1 私たち力のある者は、力のない人たちの弱さをになうべきです。自分を喜ばせるべきではありません。

パウロは、主語を自分自身も含めて、「私たち」と言っています。「私たち力のある者」ということですが、パウロは信仰の強い人たちがいて、弱い人たちもいるということをお話していました。福音の真理によって、その恵みがあるので、自由な行動を取ることができる者たちがいる反面、そうではなく、弱い人々もいるということです。しかし、ここで私たちが、自分自身を弱い人なのだ、という範疇に入れてしまうと、パウロの書いている意図から外れてしまいます。むしろ、私たち一人一人が、その信仰が神の恵みによって強められ、成長していく中で、常に、「自分自身が信仰の弱い人々を助けていくのだ」という命令を、神から受けているのだということを知るべきでしょう。ここに出て来る、「担う」という言葉ですが、パウロがガラテヤ書 6 章で書いた言葉に通じます。「6:2 互いの重荷を負い合い、そのようにしてキリストの律法を全うしなさい。」負債を持っていて、それは愛

の負債であるということ、ローマ 13 章 8 節で読みました。私たちは成熟に向かって進んでおり、自分が人々から受けるだけでなく、むしろ主にあって与えるように導かれています。

成熟している人の特徴は、自分自身を喜ばせるのではなく、他者の益になることを求めることです。それは、親が子を育てる時のようなものです。子供が食事をするのを先にさせて、いつも自分は残り物を食べているお母さんの姿があります。ぐっすり眠れない赤ん坊を育てている若い母親の姿があります。子供が学校を卒業するまで、独り立ちするまで子供を中心に動いている親たち。いつも、子供のことを第一にして、子供の益になることを考えています。こうした姿が、霊的にも、弱い人の弱さを担っているということが出来ます。私たちが、どこに喜びを感じているでしょうか？他の兄弟姉妹に仕えること、その兄弟姉妹が主にあって強められていること、そうしたことが喜びになっているでしょうか？母親が、子を育てている時に、例えば真夜中にお乳を飲ませなければいけなくとも、それでも起きます。そこにはもちろん、そうしたくないという思いが出て来るかもしれませんが、けれども育てているということに大きな喜びを感じています。そうした愛の喜びがない母親が、稀に育児放棄をして、自分は遊びほうけるのですね。私たちが、どのようなところに、喜びを感じているのかを知る必要があるでしょう。

「自分を喜ばせ」ているのかどうか、自分が成熟しているかどうかの指針であります。言い方を変えれば、どれだけ裏方で動いているかどうか？であります。自分がその恩恵にあずかっていて、神に感謝しているけれども、自分がその働きに関わっている当事者になっているかどうか？あります。ある牧師さんは、「イエス様のファンか、弟子か？」ということで、野球場におけるファンと、野球選手の違いに似ていることを話しました。同じ野球場にいるのですが、実際に関わっているのか、それとも応援はしていても自分を喜ばすだけの参加者であるにしか過ぎないのか、の違いです。賜物についても、「自分ができること」というのに集中します。しかし、コリント第一 12 章において、「みな益となるために、おのおのに御霊の現われが与えられているのです。(7 節)」とあります。みな益であり、全体の益になることを思って、初めて御霊による賜物が与えられます。

2 私たちはひとりひとり、隣人を喜ばせ、その徳を高め、その人の益となるようにすべきです。

自分自身ではなく、隣人を喜ばせることを求めます。「自分のことだけではなく、他の人のことも顧みなさい。(ピリピ 2:4)」とパウロは、ピリピの人たちに話しました。そこでも、教会の中に不一致が起こって、その一致を追い求めるために必要なこととして話しています。

ここで間違っはいけないのは、「隣人を喜ばせ」ということが、相手が願っていることを行なうということではないということです。「その徳を高め、その人の益となる」とあります。その人がキリストにあって建て上げられること、その人にとって本当に益になることを求めます。ですから、その人が必ずしも願っていることではない、むしろ不快にさせることも時としては必要になるかもしれな

ということです。パウロはこのことを、テサロニケ第一の手紙2章で話しています。「2:4-5 私たちは神に認められて福音をゆだねられた者ですから、それにふさわしく、人を喜ばせようとしてではなく、私たちの心をお調べになる神を喜ばせようとして語るのです。ご存じのとおり、私たちは今まで、へつらいのことばを用いたり、むさぼりの口実を設けたりしたことはありません。神がそのことの証人です。」人を喜ばせることを求めている人は、実はその人たちを愛しているからそうしているのではなく、自分自身が悪く思われたくないという、自分のためです。自分が忍耐し、仕えているように、実は相手の欲望を満たしているだけにしか過ぎないことがあります。これは真実な意味で、隣人を喜ばせていることではありません。

3 キリストでさえ、ご自身を喜ばせることはなさらなかったのです。むしろ、「あなたをそしる人々のそしりは、わたしの上にふりかかった。」と書いてあるとおりです。

パウロは、強い人、弱い人という人についての話をしている中で、「キリスト」ご自身を語っています。これが、教会の存在目的ですね。キリストから離れた関係など、教会にはあり得ないからです。この方が信仰の対象であり、キリスト者が生きるための模範です。ペテロも第一の手紙で、良い行いをしている中で誹りを受けることについて、キリストを持ち出していましたね(1ペテロ2:21-25)。ここで、「キリストでさえ」と書かれています。何をもち「さえ」なのかと言いますと、強い人が弱い人の弱さを担うのですが、キリストこそあらゆる特権と力を持っておられる方なのだ、ということです。それにも関わらず、主は弱い私たちの弱さを担われて、ご自身を喜ばせることは無かったということでもあります。悪魔から、「神の子であるなら、石をパンに変えなさい」と誘われた時にそれを拒まれ、神殿の頂から落ちることも拒まれ、世界の栄誉と栄華を悪魔から受け取ることも拒まれました。そして、僕の姿を取られて、仕えられたのです。

そして、「むしろ」という接続詞が付いていますが、「それどころか」ということです。ご自身を喜ばせなかったどころか、誹りさえ受けられたということです。私たちが自分自身のことについて拘っている事柄が、如何に些細なことを知るためです。私たちは、迫害のことについて語っても、目の前にいる兄弟姉妹の重荷を担うことさえできない、ということがあります。目の前の兄弟を愛せないで、どうして敵を愛することを話しているのか？であります。主は、十字架の上で「イスラエルの王なら、神の子なら、十字架から降りてもらおうか。」と誇られたのですが、イエス様ご自身は、御使いの軍団を呼び寄せることもできる力がおありでしたから、一瞬にしてそこにいるものたちを滅ぼすことはおできになりました。核兵器よりも、恐ろしい力を主はお持ちした。しかし、「父よ。彼らをお赦してください。彼らは、何をしているのか自分でわからないのです。(ルカ 23:34)」と祈られています。ご自身を救うことではなく、むしろ彼らにとって益になること、つまり今、キリストと神を冒瀆している罪が赦されるように祈られているのです。

ところでパウロが引用した箇所は、詩篇 69 篇 9 節からです。「それは、あなたの家を思う熱心

が私を食い尽くし、あなたをそしる人々のそしりが、私に降りかかったからです。」であります。ダビデが神の宮について、情熱を持っていて、神のことで誹りを受けたのだけれども、これがそのまま、キリストご自身を預言する言葉になっていました。そこでパウロは次に、聖書にある忍耐と励ましについて話していきます。

## 2B 聖書による忍耐と励まし 4-6

4 昔書かれたものは、すべて私たちが教えるために書かれたのです。それは、聖書の与える忍耐と励ましによって、希望を持たせるためなのです。

パウロはこれまで、そして15章においては特に、旧約聖書からの引用を多用します。それらが、「すべて私たちが教えるために書かれたのです。」ということです。同じように、コリント第一10章においてもイスラエルが不信仰で荒野の中で滅んだことについて、「これらのことが彼らに起こったのは、戒めのためです。それが書かれたのは、世の終わりに臨んでいる私たちへの教訓とするためです。(11節)」と教訓や戒めについても、旧約聖書に書かれていることは私たちが教えるためであることを書いています。しばしば、キリスト教会で新約聖書しか教えられないということを聞きます。あるいは、旧約聖書はイスラエルのものであり、教会は新約時代のものだという意見も聞きます。これは誤りです。旧約も新約も、私たちが教え励まし、希望を持たせるために書かれました。

「教えるため」という言葉に注目したいと思います。パウロやユダヤ人にとっての「教え」というのは、ヘブル語のトーラであり「教え」であります。言葉が翻訳される時に、その文化や思想に影響されて、誤解されて伝わることが多いです。欧米においては、トーラは「法律」とも訳せる、law が使われています。そのために、律法というもの、教えというものが、法律と同じような感覚で語られることがあります。日本ではどうでしょうか？教えと聞くと、儒教的な影響が強いでしょう、「教えを受けて、教養を深める」という意味合いが強いと思います。それでしばしばお話ししていますが、「英会話教室」のようなことが起こるのです。たくさん学ぶのですが、それを実行しない。頭で分かることが目標となっている、ということです。これが、大きな間違いです。トーラにしても、教えにしても、ユダヤ人にとっては「その中に生きる」ことです。行なうことによって、初めて学べるようなことです。スキーの講座を受けるよりも、ある程度教えてもらった、滑って見て知るといような類いのものです。あるいは、子供が親から教えを受けて、その中に生きていく、そしてそこから離れられなくなる、離れてもまた戻って来る、というような類いのものです。頭で学ぶことと、生活の一部となっていくことが同時進行で行われていくのが「教え」であります。もちろん、私たちは初めに聞いた時に、それが「頭では理解できる」という段階から入るでしょう。それを、如何に感じられるところまで、生活の中で生かしていくところまで時間がかかります。そこで、先ほどのことば、「徳を高める」ということが必要なのです。建て上げていくことが必要です。

ここでは、昔からの教えを受けて、「聖書の与える忍耐と励ましによって、希望を持たせる」とあり

ます。「忍耐」とは、ひたすらに我慢することでは決してありません。今、そうでない状況があっても、将来に確かな希望があるから、それを信じて今を耐える、ということでもあります。そして、「励まし」とは「慰め」とも訳せる言葉です。聖霊が「助け主」と主が呼ばれた言葉と同じです。「そばにいるように呼ばれて、援助する」という意味です。私たちが通っている試練について、その同じ試練や苦しみを通ったという人がいれば、私たちは慰められ、励まされるでしょう。私たちは、今の困難が自分だけのものであると思いがちです。けれども、決してそうではないことを旧約の聖徒たちは証言してくれています。ヘブル書 11 章でそれがまとめられています。そして 12 章の始まりに、こう書いてあります。「12:1 こういうわけで、このように多くの証人たちが、雲のように私たちを取り巻いているのですから、私たちも、いっさいの重荷とまつわりつく罪とを捨てて、私たちの前に置かれている競走を忍耐をもって走り続けようではありませんか。」彼らが、共に信仰の競走を走っていてくれます。「私も同じところを通ったのだよ」と励ましてくれるのです。そして、さらに一歩進むことができるように力づけるのです。

「希望」という言葉も大切です。ローマ人への手紙 5 章にも、8 章にも出て来ました。「神の栄光を望んで大いに喜んでいます。」「この希望が失望に終わることがありません。なぜなら、私たちに与えられた聖霊によって、神の愛が私たちの心に注がれているからです。(5:2,5)」「8:24-25 私たちは、この望みによって救われているのです。目に見える望みは、望みではありません。だれでも目で見ていることを、どうしてさらに望むでしょう。もしまだ見ていないものを望んでいるのなら、私たちは、忍耐をもって熱心に待ちます。」主ご自身が私たちの希望です。この方の御心を知って、この方に拠り頼むことができること自体が、希望です。そして、将来の神のご計画についても希望です。この体も、またこの世界も全てを贖ってくださいます。全てが、全きものとなる希望です。ですから、今あることについて、それを正さなければいけないと焦る必要はないのです。むしろ、忍耐を働かせて、励ますことに熱心になり、主が全てを新しくしてくださることを信じるように促すのです。

5 どうか、忍耐と励ましの神が、あなたがたを、キリスト・イエスにふさわしく、互いに同じ思いを持つようにしてくださいますように。

パウロは、14 章から書き始めている中で、根底にある願いと祈りをここに書いています。それは、「キリスト・イエスにふさわしく、互いに同じ思いを持つようにしてくださいますように。」ということです。何をもって、キリスト・イエスにふさわしくなんでしょうか？イエス様は祈られました。「ヨハネ 17:21 それは、父よ、あなたがわたしにおられ、わたしがあなたにるように、彼らがみな一つとなるためです。また、彼らもわたしたちにおるようになるためです。そのことによって、あなたがわたしを遣わされたことを、世が信じるためなのです。」主は、父なる神と一つであられました。それは、機械的に動かされているのではなく、父なる神に愛されて、子として父の言われることに従って、その交わりの中で一つとなっておられます。その御父と御子の交わりの中に私たちが招き入れられているのです。ゆえに、キリストにあって私たちが互いに同じ思いを持つようにという祈りになり

ます。

そして興味深いのは、「忍耐と励ましの神」が、と、神ご自身が忍耐と励ましを性質として持つておられることをパウロは記しています。後で「望みの神が」という言葉も言います(13 節)。私たちが互いに同じ思いになるのは、忍耐によって、そして励ましによって持っているということです。いろいろな違いがあっても、主にあって忍耐し、また弱い人たちを励ますことによって、そこに麗しい御霊の一致があります。画一的になることではありません。互いに理解して、愛によって意思疎通をしていきます。愛によって一つにされていきます。

6 それは、あなたがたが、心を一つにし、声を合わせて、私たちの主イエス・キリストの父なる神をほめたたえるためです。

一つになることによって、最終的に神の御名がほめたたえられます。神の栄光を現すことができます。そしてパウロは具体的に、私たちが心を合わせて、声を合わせて、神に栄光を帰することを話しています。私たちにある御霊の一致と、賛美を共にするというは切っても切り離せない関係です。互いに私たちが思いを一つにしていなければ、そこにある声には、調和がありません。もちろん、歌が長けている人々が集まれば一つになれるかもしれません。けれども、調和はないでしょう。そしてその反対に、私たちが声を合わせて歌う、心を一つにして歌うという賛美を大切にしなければ、私たちの中に一致が生まれえないという、逆方向もあるでしょう。賛美を礼拝の中で付け足しにするような傾向が、肉の弱さのゆえに私たちにはあります。いいえ、賛美こそが神に対する礼拝の主要な部分です。今は教えがありますが、知識や預言は完全なものがきたら廃れると、コリント第一 13 章にあります。

## **2A 異邦人の神への賛美 7-13**

そして 7 節に入ります。パウロにとって、教会の奥義である、「ユダヤ人と異邦人がキリストにあって一つの新しい人になっている」ということを、具体的に教えている部分に入ります。彼が強く訴えたい、お願いしたい部分に入ります。

### **1B 互いの受け入れ 7-12**

7 こういうわけですから、キリストが神の栄光のために、私たちを受け入れてくださったように、あなたがたも互いに受け入れなさい。

ローマ 14 章の始まり、「あなたがたは信仰の弱い人を受け入れなさい。」に戻ります。互いに受け入れるのですが、まず、「キリストが神の栄光のために」受け入れられました。私たちをキリストにあって、受け入れて、その恵みの栄光がほめたたえられるためだ、とパウロはエペソ 1 章で話しました(5-6 節)。

8 私は言います。キリストは、神の真理を現わすために、割礼のある者のしもべとなりました。それは先祖たちに与えられた約束を保証するためであり、9a また異邦人も、あわれみのゆえに、神をあがめるようになるためです。

パウロは、今、異邦人の信者を意識して話しています。「神の真理を現わすために、割礼のある者のしもべとなりました。」ユダヤ人として来られたということです。ユダヤ人に神のことばがゆだねられました。ユダヤ人に神の契約と律法が与えられました。その中にキリストが来られました。パウロは注意深く、ローマ書の冒頭から「福音は、ユダヤ人をはじめギリシヤ人にも(1:16)」と言って、ユダヤ人から始まっていることを話しています。主は、弟子たちに、「異邦人の道に行つてはいけません。サマリヤ人の町には行ってはいけません。イスラエルの家の滅びた羊のところに行きなさい。(マタイ 10:5-6)」と言われました。イエス様の心は、肉による同胞ユダヤ人にありました。そして、使徒パウロも自らユダヤ人であり、異邦人のための使徒でありながらも、彼らが救われることを切に願い、新しい町に行けばユダヤ教の会堂で教え、福音を宣べ伝えました。そういうキリストの心があるのですから、律法や言い伝えによって、信仰がまだ弱く、野菜しか食べられない兄弟がいても、彼らのためにもキリストが死んでくださったことを思い出し、受け入れなさいと命じているのです。

そして、主が割礼を受けた者のしもべとなられた目的ですが、「先祖たちに与えられた約束を保証するため」とありますね。旧約聖書は約束に満ちた書物です。最後の夜に、剣を取ったペテロに対して、剣を鞘に収めなさいと戒められ、そして言われました。「マタイ 26:54 だが、そのようなことをすれば、こうならなければならないと書いてある聖書が、どうして実現されましょう。」聖書の言葉が実現するために、わたしは来たのだということです。旧約聖書には、メシヤ、油注がれた者が来るという約束があります。既に詩篇 69 篇が 3 節に引用されていましたが、メシヤ、キリストの約束があります。そして、神の国の到来の約束があります。ガブリエルがマリヤに言いました。「ルカ 1:32-33 その子はすぐれた者となり、いと高き方の子と呼ばれます。また、神である主は彼にその父ダビデの王位をお与えになります。彼はとこしえにヤコブの家を治め、その国は終わることがありません。」

けれども、次にユダヤ人信者を意識して、パウロは書きます。「また異邦人も、あわれみのゆえに、神をあがめるようになるため」とあります。異邦人が神をあがめるようになるのは、父祖たちからの約束ではなく、もっぱら神が憐れんでくださり、イスラエルに対する約束の中に入れさせてもらうというところにあります。神の憐れみに私たちが感動して、そして神をほめたたえるのです。ツロとシドンところで、カナン人の女が叫んで娘から悪霊を追い出してほしいとお願いします。イエス様は一言もお答えになっていません。そして、話されたのですが、「イスラエルの家の滅びた羊以外のところには遣わされていません。(マタイ 15:24)」と言われました。そして、子供たちのパンを取り上げて、小犬に与えるのはよくないと言われました。ところが女は言いました。「主よ。そ

のとおりです。ただ、小犬でも主人の食卓から落ちるパンくずはいただきます。(27 節)」このようにして、異邦人であっても信じることによって、神の与えられる恵みのおこぼれに預かれています、ということでもあります。そして、マタイ 22 章の王子の披露宴の喩えにおいても、異邦人は、招待されていない、通りにいる人々を片っ端から集めた人々として出て来ます。神は、イスラエルへの約束をその一部を異邦人にも分け与えて、キリストにあつて同じ祝福にあずかれるようにして下さったということです。私たちはローマ 11 章で、オリーブの木の喩えで、野生種のオリーブの木の枝である私たちが、栽培種のオリーブの木の幹に接ぎ木されたのだということを学びました。ですから、ユダヤ人の兄弟も受け入れ、異邦人の兄弟も受け入れるのです。

9b こう書かれているとおりです。「それゆえ、私は異邦人の中で、あなたをほめたたえ、あなたの御名をほめ歌おう。」10 また、こうも言われています。「異邦人よ。主の民とともに喜べ。」11 さらにまた、「すべての異邦人よ。主をほめよ。もろもろの国民よ。主をたたえよ。」12 さらにまた、イザヤがこう言っています。「エッセイの根が起こる。異邦人を治めるために立ち上がる方である。異邦人はこの方に望みをかける。」

パウロは、聖書に書かれていることによって、希望を持たせるということを書きましたが、ここで、数多くの聖書の約束を書いています。私たちが持っている旧約聖書とは若干違った訳です。というのは、旧約聖書と新約聖書の間の中間期に、ヘブル語をギリシヤ語に訳した七十人訳というものがあって、それから引用しているからです。「国々」であるとか「諸国」と書かれているところが、「異邦人」と訳されています。そして、ここに列挙されていることには、進展があります。初めは、イスラエル人が異邦人の中で神をほめたたえます。そして異邦人に主の民の賛美に関わりなさいという呼びかけがあります。それから、異邦人自身が主をほめたたえているという内容になっています。それから、イスラエルの王であられるエッセイの根、メシヤがイスラエルのみならず、異邦人も治めるという、神の御国の幻の中に異邦人も加わっている、という内容になっています。

9 節の、「それゆえ、私は異邦人の中で、あなたをほめたたえ、あなたの御名をほめ歌おう。」は詩篇 18 篇 49 節からの引用ですが、それはサムエル記第二 22 章 50 節からの引用になっています。したがって、元々はダビデが晩年に主をほめたたえたサムエル記第二の言葉であります。ダビデは周囲の国々を征服しました。そして主を、それらの国々の中でほめたたえます、と言っています。征服された国々にとっては、征服した神をほめたたえるような気分には普通はなれないのですが、主のなされたこと、主が行なわれた勝利には、自分たちが降参したとしても、ほめたたえる御霊の働きがあるでしょう。私たちも自分たちの生活が主によって征服されて、それで主をほめたたえていますね。そして 10 節は、モーセの晩年の言葉であり、賛美で、申命記 32 章 43 節から来ています。それから、11 節は詩篇 117 篇 1 節からです。聖書の中で最も短い章です。「すべての国々よ。主をほめたたえよ。すべての民よ。主をほめ歌え。」このように、異邦人はイスラエルの神をほめたたえているのです。パウロは既にこのことをローマ 3 章で論じていました。「3:29-

30 それとも、神はユダヤ人だけの神でしょうか。異邦人にとっても神ではないのでしょうか。確かに神は、異邦人にとっても、神です。神が唯一ならばそうです。この神は、割礼のある者を信仰によって義と認めてくださるとともに、割礼のない者をも、信仰によって義と認めてくださるのです。」そして、最後はイザヤ書 11 章 10 節です。イエス様がエッセイの根株から新芽として出て来て、それが大きな木となって世界を覆われるのですが、「11:10 その日、エッセイの根は、国々の民の旗として立ち、国々は彼を求め、彼のいこう所は栄光に輝く。」とあります。すばらしいですね、私たちは、狼が子羊とともに宿る、その平和と正義の国の中に招き入れられているのです！

そしてパウロはユダヤ教の教師らしい論じ方です。ダビデの言葉も、モーセの言葉も、そして詩篇から、また預言者から引用しています。旧約聖書の分類、またユダヤ人の指導者として認められている人から全てを網羅して論証しています。主は、このようにして異邦人をもご自分の栄光をほめたたえるように招かれていたのです。

## 2B 望みによる満たし 13

そしてまとめになる、願いと祈りを捧げています。13 どうか、望みの神が、あなたがたを信仰によるすべての喜びと平和をもって満たし、聖霊の力によって望みにあふれさせてくださいますように。

神が、「望みの神」であります。私たちのあらゆる希望の源であります。私たちは、人や環境をみたら失望します、しかし主にこそ希望を置くことができます。そして、「信仰によるすべての喜びと平和」とありますね。私たちが神と御言葉を信じている時に、喜びがでできます。そして、平和があります。喜びと平和があってほしいという願いです。そして、「聖霊の力によって」であります。聖霊の力に拠らなければ、希望を抱くことはできません。先に 5 章で、聖霊が神の愛を注いでおられるので、私たちの希望が失望に終わらないとありました。私たちが絶えず、聖霊の注ぎを受けて、神の愛を一杯に受けて、それで望みを抱くことができます。そして、「望みにあふれさせてくださいますように」であります。望みに満たされるだけでなく、溢れさせてくださいますようにと祈っています。私たちが神の栄光を望んで、大いに喜んでいる姿です。私たちが、神ご自身と御国についての幻で、喜び踊っているようにしていることです。この望みが溢れている中で、私たちは同じ思いを持つことが出来るし、声を一つにして主をほめたたえることができます。